医療生協かながわ生活協同組合

『東日本大震災』対策本部ニュース

2011 年 3 月 30 日(水) 14 時 00 分　No.24

義援金到達 1,604,931 円

第 4 次支援隊、昨夜無事帰着!

＜現地支援レポート＞

戸塚病院　健診事務センター　荻生　雄毅

無事終了し、帰着しました。

3 日目私と高橋さんは避難所訪問、小野塚さんは引き続き泊まり込みで老健支援、倉内さんは日勤＋夜勤で現場支援に入りました。

昨日に引き続き支援に訪れた、天真小学校はピーク時は避難者数 1,500 名を数える市内第二位の避難所でしたが、現在は 800 名まで避難者の数が減り、その後横ばいが続いています。

初日は地元の郵便局と沖縄県の国民新党有志による沖縄そばの炊き出し。2 日目はオムロンからの電子血圧計 4 台の差し入れ。3 日目は自衛隊による音楽演奏があり。様々な多くの力に被災地が支えられている事を実感しました。

避難所の代表者からも、坂総合病院からの日中夜間にかけての医療スタッフ滞在により、「目に見えて急性期の患者が減った」と、帰りがけの申し送りで厚い感謝の念が切々と述べられていました。

一方、衛生面においてはドライシャンプーや足湯、仙台駅からの温泉地への日帰り有料送迎、ビジネスホテルやフィットネスクラブのシャワールームの開放、自衛隊の入浴施設などが各所で展開されてはいますが、それらに自ら赴く事の出来ない高齢者の方は 2 週間入浴出来ない状況が続いており、またそのほかにも、長期化にともなう避難生活からのストレスなどが散見し始め、福利厚生などの観点に立った医療的アプローチが求められる段階に現状シフトしている様に感じられました

タウンニュース®

株式会社タウンニュース社 ☎045-824-6800㈹ FAX045-824-6700 戸塚区編集室・〒244-0803横浜市戸塚区平戸町259 http://www.townnews.co.jp 発行責任者／宇山 知成 編集長／山下 晶弘

戸塚 東北ぐつな

「人間て、やっぱり強い」

医療生協の看護師ら 被災地で救援活動

「思ったよりも被害が少ない」。緊急車両の窓ごしに見える仙台市の街並はそう映った。同市を過ぎ、塩竈市に入ったところで状況は一変した。折り重なる大量の車、侵入した津波の跡、土気色の街…。「壊滅だ」

医療生協かながわ生活協同組合の戸塚病院（戸塚町）に勤務する島田みのりさん（36）と齋藤彰久さん（43）、事務の3人は、3月15日から3日間、東日本大震災の被災地、宮城県塩竈市の坂総合病院で救援活動を行った。

齋藤さんは、傷病程度を分類するトリアージにより、「最優先に治療」と判断された人の個人情報を家族などから聞き出す役割を担い、島田さんは「待機」の人を看護した。当時は余震が頻繁にあり、「揺れているのが普通」の状況。サイレンは鳴り止まず、あたりは騒然としていた。

阪神・淡路大震災に続き、被災地での救援活動は2回目の齋藤さん。阪神の際は「青臭い青年だった」というが、今回は医療従事者として経験を積んだこともあり、「まずは仲間の助けになろう」。冷静ながらもふつきれた思いがあった。一刻を争う状況下で、淡々と業務に努めた。阪神の様子をテレビで見るしかなかった島田さん。初めての被災地での救援活動に「使命感があった」。だが、患者からの「家が流された」「現実じゃないみたい」―。返す言葉がなかった。ただ黙って聞くことしかできなかった。

口論の中に笑顔

被災地を発つ予定だった17日の朝。島田さんは齋藤さんに許可をとり、夜勤後に避難所の塩竈市立第三中学校に向かった。毛布にくるまり寝ている高齢者、ぜんそく持ちの子を案ずる母親など、不安を抱える様々な人がいた。そんな中、ある母娘が口論をしていた。宮城を離れたくないという母親、東京へ行くべきと主張する娘。言い争いの中にも、そこにはユーモアと笑顔があった。「こんな状況でも、笑顔になれるんだ」。当時を振り返る島田さんは、「言葉にすると安いけど」と何度か前置きした上で、「人間って、やっぱり強いんだ」。

同組合は当面、3泊4日のペースで看護師などを被災地へ派遣するという。

活動を振り返る島田さん(左)と齋藤さん

タウンニュース＜戸塚区版＞に、被災地での支援状況が掲載されました。

全国からの支援者は、1209 人
医師 233 人、看護師人 374、
事務 350 人　他（民医連集計 29 日現在）